

愛知県西三河地域における人口動態とその変化 : 三好町を事例として

著者	戸谷 修
雑誌名	椋山女学園大学研究論集 社会科学篇
号	31
ページ	63-82
発行年	2000
URL	http://id.nii.ac.jp/1454/00001381/

愛知県西三河地域における人口動態とその変化

——三好町を事例として——

戸 谷 修

Trends and Characteristics of Population Structure in Miyoshi-cho, Aichi

Osamu TOTANI

1. はじめに

本稿は高度経済成長がはじまった1950年代のなかば頃から現在に至るまでの愛知県西三河地域に位置する三好町の人口の推移とそこにみられる構造的特徴を明らかにしようとするものである。当地域は1950年代なかば頃まではきわめて後進的な農村であったが、トヨタ自動車本社工場に近いところに位置していたこともあって、その後、輸送機器製造業の中核地域へと急激に変貌していったところである¹⁾。当地域の社会変動の大きさは産業別町内総生産の構成比の変化(表1)、ならびに産業別就業者数の推移(表2)からもその概要を把握することができよう。

2. 三好町における人口の推移

まず、1950年代なかごろから現在に至るまでの人口の推移について述べておこう。表3に示したように1950年に9,372人であった三好町の人口は、1960年ごろまではいくらか減少化の傾向がみられたが、1960年に工場誘致条例が施行され多くの工場が設立されるようになると、いままでならば流出していった若い人びとが三好町にとどまるようになり、また多くの人びとが他の地域から流入するようになり、急激に人口が増加しはじめた。この点は表4に示されているように、1950年代の終りごろから1970年代のはじめごろまで、自然増よりも社会増のほうが圧倒的に多かったことから明らかである。たとえば、1962年から1966年までの5年間についていえば、その時期の人口増加は5,121人であった。そのうち社会増が三好町の人口増加の85.7%を占めている。三好町の人口は、1960年代のなかごろから1970年代のなかごろまでについていえば、5年間ごとに約5,000人ずつ人口増となっている。しかし、1970年代の後半ごろになると1960年代にみられたような大幅な人口増加はなくなり、5年間に約2,000人～3,000人の増加にとどまっている。この時期の三好町の人口動態は、それ以前の様相とはすっかり変わってきている。1960年代では人口増加の主要因は転入超過にもとづく社会増であったが、1970年代の後半から1980年代の終

戸 谷 修

表1 産業別町内総生産構成比の推移

(町内総生産単位:百万円)
第1～3次産業: %)

	町内総生産	第1次産業	(うち) 農 業	第2次産業	(うち) 製造業	建設業	第3次産業	(うち) 卸売・小売・飲食店	サービス業	不動産業
1960(昭和35)年	587	45.0	45.0	22.9	10.1	12.8	32.1	12.5	11.6	—
1963(昭和38)年	1,016	32.3	32.3	34.4	22.8	11.5	33.3	11.6	12.4	—
1965(昭和40)年	2,450	16.2	16.1	56.0	46.0	10.0	27.8	8.6	7.8	—
1970(昭和45)年	15,189	6.4	6.4	77.4	74.2	2.3	16.2	3.6	4.8	—
1975(昭和50)年	44,390	4.3	4.3	74.5	68.7	5.8	21.8	5.4	6.4	—
1980(昭和55)年	(74,508)	2.3	2.3	67.6	63.4	4.2	30.1	8.0	8.3	6.0
1985(昭和60)年	192,144	0.8	0.8	80.9	78.6	2.3	18.3	4.4	4.5	3.6
1990(平成2)年	217,603	0.7	0.7	75.4	71.8	3.6	23.9	4.2	7.4	4.9
1992(平成4)年	247,337	0.6	0.6	71.3	67.2	4.1	28.1	4.7	7.1	7.1
1994(平成6)年	243,956	0.6	0.6	65.6	61.1	4.5	33.8	4.8	7.6	10.9
1995(平成7)年	250,214	0.5	0.5	70.5	66.0	4.5	29.0	4.4	6.5	9.4
1996(平成8)年	271,773	0.5	0.5	70.3	65.8	4.5	29.2	3.9	6.4	10.0

(出所) 各年次「あいちの市町村民所得」より作成
ただし、() は純生産額

表2 三好町における産業別就業者数の推移 (15歳以上)

() の数字は%

年	総 数	1955年を100 とした値	第1次産業	第2次産業		第3次産業		
			計	計	うち製造業	計	うち商業	うちサービス業
1955(S.30)	4,233	100	3,224(76.2)	394(9.3)	257(6.1)	615(14.5)	225(5.3)	38(0.9)
1960(S.35)	4,913	116	3,209(65.3)	851(17.3)	564(11.5)	852(17.4)	320(6.5)	317(6.5)
1965(S.40)	7,160	169	2,586(36.1)	2,711(37.9)	2,267(31.7)	1,861(26.0)	626(8.7)	607(8.5)
1970(S.45)	9,945	235	2,006(20.2)	5,005(50.3)	4,427(44.5)	2,873(29.5)	1,041(10.5)	1,051(10.6)
1975(S.50)	11,291	267	1,320(11.7)	5,750(50.9)	4,845(42.9)	4,165(37.4)	1,471(13.0)	1,474(13.1)
1980(S.55)	12,974	306	1,068(8.2)	6,548(50.5)	5,528(42.6)	5,353(41.3)	2,066(15.9)	1,890(14.6)
1985(S.60)	14,265	337	937(6.6)	7,233(50.7)	6,173(43.3)	6,089(42.7)	2,240(15.7)	2,244(15.7)
1990(H. 2)	16,311	385	784(4.8)	8,331(51.1)	7,089(43.5)	7,170(44.0)	2,551(15.6)	2,786(17.1)
1995(H. 7)	20,981	496	829(4.0)	9,765(46.6)	7,973(38.0)	10,348(49.4)	3,805(18.1)	4,132(19.7)

(出所) 各年次国勢調査

愛知県西三河地域における人口動態とその変化

表3 三好町の人口・世帯の推移

	人 口					世 帯		1950年を100とした値		性 比
	人口総数	男	女	対前回 人口増加数	対前回 人口増加率	世帯数	一世帯当 りの人数	人口値	世帯値	
	人	人	人	人		戸	人			
1950(S.25)	9,372	4,786	4,586	—	—	1,682	5.57	100	100	104.4
1955(S.30)	9,006	4,607	4,399	−366	−3.91	1,689	5.33	96	100	104.7
1960(S.35)	9,161	4,702	4,459	155	1.72	1,760	5.21	98	105	105.5
1965(S.40)	14,438	8,133	6,305	5,432	59.29	2,720	5.31	154	162	129.0
1970(S.45)	19,734	10,133	9,204	5,296	36.68	4,385	4.50	211	261	110.1
1975(S.50)	25,503	13,515	11,788	5,769	29.23	6,086	4.16	270	362	114.7
1980(S.55)	28,552	15,263	13,289	3,049	11.96	7,330	3.89	305	436	114.9
1985(S.60)	30,039	16,044	13,995	1,487	5.21	7,816	3.84	321	465	114.6
1990(H.2)	32,241	17,335	14,908	2,202	7.33	8,842	3.65	344	526	116.3
1995(H.7)	39,923	21,437	18,576	7,682	23.83	12,188	3.28	426	725	115.4
1999(H.11)	44,768	23,136	21,632	4,845	12.1	15,117	2.96	478	899	107.0

(出所) 各年次『国勢調査』より作成

表4 三好町における人口動態の推移

(単位：人、%)

	自 然 増 減			社 会 増 減				人口増加数 (A)+(B)	増 加 率		
	出 生	死 亡	増加数(A)	転 入	転 出	その他	増加数(B)		総増加率	自然増	社会増
1955(S.30)	165	73	92	209	345	—	−136	−44	−0.48	1.02	−1.50
1960(S.35)	163	72	91	283	319	—	−36	55	0.98	0.39	0.59
1965(S.40)	298	75	223	2,105	683	9	1,431	1,654	14.61	1.97	12.64
1970(S.45)	457	94	363	2,950	1,439	—	1,511	1,874	9.80	2.05	7.75
1975(S.50)	459	100	359	1,765	1,410	—	355	714	2.82	1.71	1.11
1980(S.55)	365	92	273	1,396	1,263	12	145	418	1.39	1.08	0.31
1985(S.60)	331	107	224	1,384	1,302	−10	72	296	0.65	0.69	−0.04
1990(H.2)	337	161	176	2,240	1,428	22	834	1,010	1.85	0.62	1.23
1995(H.7)	552	185	367	3,548	2,156	12	1,404	1,771	5.07	0.84	4.23
1990(H.10)	603	173	430	3,448	2,402	24	1,070	1,500	3.53	1.01	2.52

(出所) 各年次『国勢調査』より作成

りごろまでについていえば社会増加率が1.2～2.0%程度に低下し、ときには転入者よりも転出者のほうが多い年次さえみられるようになっていく。したがって、この時期の三好町における人口増加の主要因となったのは自然増であった。ところが、三好ヶ丘ニュータウンが生まれた1990年以降、三好町の人口増加率は再び上昇に転じ、1992年から1997年まで5年間に実に8,000人近くの増加になっている。1999年11月現在、三好町の人口は44,768人となっているから、1955年から約45年間に約4.7倍になったことになる。

ところで、三好町における人口増加の推移を愛知県全体のそれと比較してみると、かなり異なった傾向がみられる。愛知県全体の人口は当地域がわが国屈指の製造業の中核地帯であったこともあって、高度経済成長に伴って1950年代から1970年代の前半ごろまで、九州や北陸地方の後進地域から多くの労働力が流入し、著しい社会増があらわれ総人口が非常に増加したところである²⁾。しかし、1970年代の後半以降になると、石油ショック、さらに四大工業地帯中心の工業政策から地方分散化の方向にわが国が開発の方式を大きく転換したこともあって、愛知県全体についていえば、1970年代後半ごろまで増え続けてきた他県からの転入超に伴う社会増は急激に低下し、愛知県の人口増加は鈍化していった。しかし、三好町の場合には、トヨタ自動車を主とする輸送機器製造業が当初豊田・刈谷からはじまったが、その拡大化の波が三好町にも及ぶようになり、愛知県のなかでも三好町は、豊田・刈谷などとともにより顕著な地域として人口が増大し続けた。とりわけ、三好町の場合には、町がおし進めた積極的な工場誘致政策が功を奏し、1965年前後からトヨタ自動車の3,000人規模の分工場がいくつかつくられるようになり、三好町に著しい社会増がみられるようになった³⁾。

愛知県全体をみた場合、1970年代の終りごろになると、わが国の高度経済成長も終りを告げ、低成長へと日本経済全体がシフトしていったこと、さらには製造業が生産拠点を海外へ移転させるといった動きが生じてくるなかで、名古屋南部地域に広がっていた製鉄・造船・化学工業を中核とする臨海工業地帯に著しいかげりがみられるようになったのとは対照的に、豊田・刈谷・三好に広がる自動車を中心とする内陸型製造業は、わが国全体におそいかかった経済危機をそれほど深刻に蒙ることなく成長し、その結果、愛知県全体では人口増加が殆ど停滞してしまったにもかかわらず、三好町の場合には人口増加はその後も続き、1965年14,438人だった人口は10年後の1975年には25,303人、さらに1985年には30,039人となっている。また、1990年代に入ると三好町では再び転入超過に伴う社会増が大幅に見られるようになり、1999年時点では4万5,000人近くの人口を擁するようになった。ただ、1990年代に入ってから社会増は1950年代の終りごろから1970年代のなかごろまでのような後進地域から流入してくる製造業従事者の転入による社会増ではなく、三好ヶ丘ニュータウンの入居が始まったことによる社会増であることを留意しておく必要がある。三好ヶ丘ニュータウンは名鉄豊田線の延長に伴う開発のなかでつくられてきた住宅団地で、2020年にはニュータウンだけで2万400人の人口がみこまれている⁴⁾。

3. 当地域における人口構造の特徴

三好町の人口を年少人口、生産年齢人口、老年人口に区分してみると当地域の人口構造の特徴が鮮明になる。まず表5によれば0～14歳までの年少人口では以下のような傾向を

表5 三好町の年齢階層別人口構成の推移

(単位：人、(％))

	0 ～ 14 歳			15 ～ 64 歳			65 歳 以 上		
	男	女	計	男	女	計	男	女	計
1955(S.30)	1,586	1,445	3,031(33.7)	2,743	2,664	5,407(60.0)	278	290	568(6.3)
1960(S.35)	1,368	1,311	2,679(29.2)	3,018	2,803	5,821(63.5)	316	345	661(7.3)
1965(S.40)	1,640	1,614	3,254(22.5)	6,132	4,287	10,419(72.2)	361	404	765(5.3)
1970(S.45)	2,471	2,402	4,873(24.7)	7,611	6,305	13,916(70.5)	448	497	945(4.8)
1975(S.50)	3,735	3,567	7,302(28.9)	9,255	7,566	16,821(66.4)	524	654	1,178(4.7)
1980(S.55)	4,098	3,885	7,983(28.0)	10,522	8,499	19,021(66.6)	643	905	1,548(5.4)
1985(S.60)	3,602	3,450	7,052(22.2)	11,642	9,354	20,996(71.1)	798	1,190	1,988(6.7)
1990(H.2)	3,094	2,867	5,961(18.5)	13,222	10,577	23,799(73.8)	977	1,453	2,430(7.5)
1995(H.7)	3,707	3,415	7,122(18.0)	14,431	13,100	27,531(74.2)	1,240	1,674	2,914(7.8)
1998(H.10)	4,224	3,939	8,163(18.5)	17,577	14,526	32,103(72.9)	1,710	2,063	3,773(8.6)

(出所) 各年次「国勢調査」より作成

確認することができる。1970年から1975年にかけての第2次ベビーブームの時期には年少人口の比率はいくらか増大したものの、1955年から現在にいたる動向としては年少人口比は徐々に減少化の途をたどっている。この点は1960年全人口に占める年少人口比は29.2%であったが次第に減っていき、1998年時点では18.5%となっていることから明らかである。この動向は愛知県にみられる年少人口比の推移とそれほど大きく異なっていない。(愛知県 1960年：27.3%，1998年：15.7%)

また、三好町の15歳から64歳までの生産年齢人口は1955年から現在に至るまで徐々にその比率を増大させている。1960年三好町全人口に占める生産年齢人口比は63.5%であったが、1998年時点では72.9%となっている。この生産年齢人口比は1960年代なかばごろから急激に増大しているが、それは当地域に多くの企業が誘致され、製造業に若い雇用労働力が大量に流入してきたことによるものである。(愛知県 1960年：67.5%，1998年：70.8%)

なお、老年人口についてみると、三好町のそれは1960年7.3%であったが、その後一時、1970年には、4.8%と低下したが、徐々に数値を増しており、1990年には7.5%を示し三好町も高齢化社会へと突入した。1998年時点では8.6%となっているから、この約45年間に三好町では2.3ポイント上昇したことになる。愛知県の老年人口比が1998年現在、13.4%であることから、三好町の高齢化はまだそれほど深刻なものにはなっていない。その理由は1960年代の終りごろから三好町に若年労働力が製造業を中心に大量に流入したこと、また1990年以来、着々とすすめられてきた三好ヶ丘ニュータウンへ入居する人びとのうち若いカップルが多かったため、三好町全体の老年人口率を著しく抑えてきたことによるものである。(愛知県 1960年：5.2%，1998年：13.4%)

三好町の人口は1999年11月現在、44,768人で、男性が23,136人、女性が21,632人で、男

性が女性を1,504人上回っている。ここ2～3年、男女間の人口差は縮小化の傾向にあるが、数年前までは男性のほうがいつもかなり多かった。女性を100とした性比についていえば、男性の数値は表3に示されているように1965年ごろの異常な数値129を除けば、1970年代から現在に至るまで115を上下する数値を示しており、性比の数値では三好町は愛知県内においてももっとも高い数値を示している。

0～14歳までの年少人口では男女差は殆どなく、また、65歳以上の老年人口では、むしろ女性のほうが多くなっているにもかかわらず、三好町全体の性比では男性のほうが女性よりもかなり多い。それは15歳から64歳までの生産年齢人口に性比が鋭くあらわれているためである。これは三好町に輸送機器を中心とする数多くの企業が誘致され、稼働するようになったところから著しく現れてきた現象である。1965年の国勢調査結果によれば、15～19歳、20～24歳、25～29歳の年齢階層のところに性比は鋭くみられた。このことは1950年代後半以降、三好町で稼働しはじめた多くの企業では、工業労働力として10歳代後半の中学卒の若年労働者や20歳代の若い年齢層の男性の労働力を数多く調達したためである。ところが1970年代になると高校への進学率が全国的にも高まったためか、10歳代の若年労働力は急減し、30歳代から40歳代のところで女性に比べて男性の人口数値が著しく高くなっている。このことはこの時期になると調達されている労働力が以前に比べて年齢が高くなっていることを示している。

最近の人口の動向をみると、このほか三好町の人口構造にいくつかのきわだった変化があらわれているが、その一つに高齢人口の増加があげられる。65歳以上の高齢者の人口は表5に示したように、1965年の765人から1998年の3,773人と、この約35年間に4.93倍に増加している。同じ時期における年少人口の伸びが2.51倍、生産年齢人口の伸びが3.08倍であるから、高齢人口の伸びがいかに高いものであるかが理解される。その結果、三好町の全人口に占める高齢者人口の割合も徐々にではあるが確実に高まっている。また、三好町でも1947年ごろから1950年ごろまでに生まれた団塊の世代とよばれている現在50歳代の住民とその子の世代である1971年から1974年生まれの第2次ベビーブーム層(団塊ジュニア)の二つの年齢層の人口が他の年齢階層にくらべると多いことから、この団塊の世代とよばれる人びとが65歳以上となるころには三好町でも高齢人口の割合は急激に高くなることが予想される。

4. 家族構造とその変化

世帯数の推移についてみると、1950年、三好町では1,682世帯であったが、年次を経るに従って次第にふえ、1999年11月現在では15,117世帯となっていて、世帯の増加率は人口増加率を大きく上回っている。世帯数、人口数ともに1950年の数値を100とした場合、表3にみられるように1999年11月時点、世帯数では899、人口数では478となっており、この約50年間に世帯数では9倍弱となっている。これは三好町の1世帯当たりの平均世帯人員が1950年、5.57人から50年間を経過した1999年には2.96人と減少していることから確認される⁵⁾。家族成員数の縮小化がおしよせてきているのである。

また、世帯を家族類型別にみると表6に示されているように三好町では愛知県全体の動向にくらべて単独世帯(1995年:20.8%)の割合はきわめて低く三世代家族世帯や核家族世

表6 三好町における世帯の家族類型別一般世帯数と親族人員、その比率

(単位：人、%)

区 分		一 般 世 帯												非親族世帯	単 独 世 帯
		総 数	親 族 世 帯												
			総 数	核 家 族 世 帯						そ の 他 の 親 族 世 帯					
				総 数	夫 の 婦 子	夫 婦 と 子 供	男 親 と 子 供	女 親 と 子 供	総 数	直系家族型世帯	傍系親族を含む世帯	その他の親族世帯			
1975年 (S.50)	一 般 世 帯	5,954	5,488	4,186	550	3,456	34	146	1,302	812	433	57	7	459	
	親 族 人 員	22,734	22,268	14,986	1,100	13,424	83	379	7,282	4,388	2,699	195	7	459	
	一世帯当たり親族人員	3.82	4.06	3.58	2.00	3.88	2.44	2.60	5.59	5.40	6.22	3.42	1.00	1.00	
	家族類型別の割合 (%)	100.0	92.2	70.3	9.2	58.1	0.6	2.5	21.9	13.7	7.3	1.0	0.1	7.7	
1980年 (S.55)	一 般 世 帯	6,887	6,233	4,781	553	3,962	49	217	1,452	1,068	324	60	9	645	
	親 族 人 員	26,058	25,395	17,373	1,106	15,579	128	560	8,022	5,788	2,041	202	9	645	
	一世帯当たり親族人員	3.78	4.08	3.64	2.00	3.93	2.61	2.58	5.54	5.41	6.30	3.37	1.00	1.00	
	家族類型別の割合 (%)	100.0	90.5	69.4	8.0	57.5	0.7	3.2	21.1	15.9	4.9	0.9	0.1	9.7	
1985年 (S.60)	一 般 世 帯	7,788	6,567	4,937	624	3,983	67	263	1,630	1,234	322	74	13	1,208	
	親 族 人 員	27,833	26,612	17,775	1,218	15,677	177	673	8,837	6,623	1,988	226	13	1,208	
	一世帯当たり親族人員	3.57	4.05	3.60	2.00	3.94	2.64	2.56	5.42	5.37	6.17	3.05	1.00	1.00	
	家族類型別の割合 (%)	100.0	84.3	63.4	8.0	51.1	0.9	3.4	20.9	15.9	4.2	1.0	0.2	15.5	
1990年 (H. 2)	一 般 世 帯	8,764	7,234	5,540	891	4,218	89	342	1,694	1,296	320	78	13	1,517	
	親 族 人 員	29,922	28,392	19,223	1,782	16,349	228	864	9,169	6,917	2,002	250	13	1,517	
	一世帯当たり親族人員	3.41	3.92	3.47	2.00	3.88	2.56	2.53	5.41	5.34	6.26	3.21	1.00	1.00	
	家族類型別の割合 (%)	100.0	82.5	63.2	10.2	48.1	1.0	3.9	19.3	14.7	3.7	0.9	0.2	17.3	
1995年 (H. 7)	一 般 世 帯	12,157	9,600	7,711	1,740	5,386	121	464	1,889	1,447	336	106	40	2,517	
	親 族 人 員	37,821	35,264	25,274	3,480	20,362	293	1,139	9,990	7,590	2,060	340	40	2,517	
	一世帯当たり親族人員	3.11	3.67	3.28	2.00	3.78	2.42	2.45	5.29	5.25	6.13	3.21	1.00	1.00	
	家族類型別の割合 (%)	100.0	78.9	63.4	14.3	44.3	1.0	3.8	15.5	11.9	2.7	0.9	0.3	20.8	

(出所) 総務庁統計局、各年次『国勢調査』より作成

- (注) 1. 直系家族型世帯とは夫婦と両親、夫婦と片親、夫婦と子供と両親、夫婦と子供と片親の世帯
 2. 傍系親族を含む世帯とは夫婦と他の親族、夫婦・子供と他の親族、夫婦・親と他の親族、夫婦・子供・親と他の親族の世帯
 3. その他の親族の世帯とは兄弟姉妹のみ、他に分類されない親族世帯である

帯（1995年：63.4％）の割合が高い。愛知県全体の数値（1995年、核家族世帯59.2％、単独世帯25.1％）が全国平均のそれ（1995年、核家族世帯58.7％、単独世帯25.6％）とほぼ同じ傾向をとっていることからいえば、三好町の家族は全国平均の場合とくらべて、伝統的家族と戦後形成された核家族とを調和よく保持しているといえる。三好町における最近20年間の世帯を家族類型に分けてみた場合、「核家族世帯」はいうに及ばず「直系家族型の世帯」でも増加していることは留意すべきである。例えば、核家族世帯では1975年に4,186世帯であったが1995年には7,711世帯と実に1.8倍にも増加しており、また「その他の親族世帯」でも1975年に1,302世帯であったものが1995年には1,889世帯へと減少せずに増加している。しかしながら、1975年には459世帯（世帯全体の7.7％）に過ぎなかった単独世帯が1995年には2,517世帯（世帯全体の20.8％）へと大幅に増加しているため⁶⁾、家族類型別にみた比率をみれば、「核家族世帯」も「直系家族型の世帯」もともに減少しており、比率からみれば戦後一貫して進んできている核家族化の動きが後退したかの印象さえ与える。しかし、実数としては核家族世帯は最近の20年間をみただけでも3,525世帯も増加しているのである。また、単独世帯は比率としては1975年、わずか7.7％にすぎなかったが1995年には20.8％と著しい増加がみられるのであるが、それは1人で構成された世帯であるから、1995年の時点で三好町の核家族世帯は平均3.7人、「その他の親族世帯」では平均5.3人であることからいえば、三好町の人びとは100人のうち67人が核家族世帯のなかで生活しており、26人の人びとが「その他の親族世帯」で暮らしており、単独世帯ではわずか7人がそこに属しているに過ぎないこととなる。

表7 三好町の65才以上の高齢者のいる家族類型

(単位：人)

世帯の家族類型	三 好 町										愛知県	全国
	1975年 (S.50)		1980年 (S.55)		1985年 (S.60)		1990年 (H.2)		1995年 (H.7)		1995年	1995年
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	%	%
65才以上の高齢者のいる世帯												
総 数	925	(100.0)	1,179	(100.0)	1,432	(100.0)	1,628	(100.0)	2,127	(100.0)	(100.0)	(100.0)
(1) 核 家 族 世 帯	123	(13.3)	154	(13.1)	230	(16.1)	332	(20.4)	581	(29.0)	(37.3)	(40.4)
(うち) 夫婦のみの世帯	62	(6.7)	77	(6.5)	132	(9.2)	187	(11.5)	311	(17.3)	(22.0)	(23.8)
夫婦と子どもの世帯	41	(4.4)	44	(3.7)	55	(3.8)	74	(4.6)	147	(7.3)	(8.5)	(9.0)
男親と子どもの世帯	2	(0.2)	3	(0.2)	2	(0.2)	7	(0.4)	25	(0.9)	(1.1)	(1.2)
女親と子どもの世帯	18	(2.0)	30	(2.5)	41	(2.9)	64	(3.9)	98	(3.5)	(5.7)	(6.4)
(2) その他の親族世帯	774	(83.7)	981	(83.2)	1,144	(80.0)	1,202	(73.8)	1,395	(65.7)	(48.1)	(42.3)
(うち) 直系家族型世帯	521	(56.3)	747	(63.4)	891	(62.2)	933	(57.3)	1,098	(51.6)	(38.7)	(32.0)
夫婦と両親の世帯	6	(0.7)	10	(0.9)	15	(1.0)	18	(1.1)	39	(1.8)	(1.2)	(1.2)
夫婦と片親の世帯	26	(2.8)	25	(2.1)	44	(3.0)	65	(4.0)	85	(4.0)	(4.3)	(4.5)
夫婦・子ども・両親	202	(21.8)	301	(25.5)	332	(23.2)	365	(22.4)	454	(21.3)	(13.7)	(10.4)
夫婦・子ども・片親	287	(31.0)	411	(34.9)	500	(34.9)	485	(29.8)	520	(24.5)	(19.5)	(15.9)
その他の親族世帯	253	(27.4)	234	(19.8)	253	(17.8)	269	(16.5)	297	(14.1)	(9.4)	(10.3)
(3) 非 親 族 世 帯	0	(0)	0	(0)	1	(0.1)	1	(0.1)	3	(0.1)	(0.1)	(0.1)
(4) 単 独 世 帯	28	(3.0)	44	(3.7)	57	(4.0)	93	(5.7)	148	(5.2)	(14.5)	(17.3)

(出所) 各年次『国勢調査』より作成

また、高齢人口の増加に伴って、65歳以上の高齢者をかかえている世帯も1975年の925世帯から1995年には2,127世帯へと、この20年間に1,202世帯も増加している。これら65歳以上の高齢者のいる世帯を家族類型別にみると表7にみられるように、その8割近くは高齢者とその子ども夫婦との同居という世帯であるが、高齢者のみの夫婦世帯や高齢者だけの単独世帯もかなり増加している。高齢者のみの夫婦世帯は、この20年間に13.3%から29.0%に、また高齢者のみの一人住いの世帯では3.0%から5.2%へと増加している。高齢者のみの夫婦世帯はこの10年間（1985年から1995年まで）に124世帯、また、高齢者だけの単独世帯も同期間に91世帯も増加している。この点は行政がなすべき社会的ケアを今後大きな問題としていることを示している。高齢化の問題は今後三好町にも大きな問題を投げかけてくることは間違いない。

5. 出生率の変化とその特徴

1947年から1949年までのベビー・ブームの頃の三好村における普通出生率は人口1,000人に対して32.3～34.3であった。その数値はその後現在に至るまでの出生率とくらべると、きわめて高い数値を示している。ところで、このベビー・ブームの過ぎた1951年には表8にみられるように出生率は急速に低下し、18.8となっている。出生率はベビー・ブームの1947年から10年後にはほぼ半分までに低下したのである。その後、1950年代のなかごろから1960年代のなかごろまでの出生率は低くなった数値で横ばい状態であった。この期間の三好町では最低15.1（1956）、最高21.5（1964）の幅を上下しながら推移していた。ところ

表8 三好町の人口動態（自然増加）の推移

（単位：人、‰）

年 次	三好町 出生数	出 生 率			三好町 死亡数	死 亡 率			三好町 自然増数	自 然 増 率		
		三好町	愛知県	全国		三好町	愛知県	全国		三好町	愛知県	全国
1947(S.22)	(327)	(35.2)	(33.4)	(34.3)	(97)	(10.5)	(13.8)	(14.6)	(230)	(24.7)	(19.7)	(19.7)
1950～54(S.25～29)	921	20.2	21.3	23.7	354	7.8	8.7	9.4	567	12.4	12.6	14.3
1955～59(S.30～34)	791	17.4	17.1	18.1	334	7.3	7.3	7.9	457	10.1	9.8	10.3
1960～64(S.35～39)	935	18.6	18.4	17.2	420	8.4	6.4	7.3	515	10.2	12.0	9.9
1965～69(S.40～44)	1,754	21.2	20.2	17.8	431	5.2	5.8	6.9	1,323	16.0	14.5	10.9
1970～74(S.45～49)	2,840	25.1	21.8	19.1	481	4.3	5.5	6.6	2,359	20.8	16.3	12.4
1975～79(S.50～54)	2,305	17.2	16.9	15.6	521	3.9	5.1	6.2	1,784	13.3	11.7	9.5
1980～84(S.55～59)	1,758	12.0	13.5	12.9	514	3.5	5.1	6.1	1,244	8.5	8.3	6.8
1985～89(S.60～H.元)	1,664	10.7	11.8	11.1	605	3.9	5.4	6.3	1,059	6.8	6.4	4.7
1990～94(H.2～6)	1,994	11.3	10.7	9.9	797	4.5	5.9	6.9	1,197	6.8	4.8	3.0
1995～98(H.7～10)	(2,284)	(13.8)	(10.7)	(9.6)	(757)	(4.6)	(6.3)	(7.3)	(1,527)	(9.2)	(4.4)	(2.3)

（出所）『愛知県衛生年報』各年次より作成

（注）1947(S.22)は単年のみの数字、1995～98年は4年間の数字

が三好町では「ひのえうま」の年であった1966年には16.6（全国13.7）という異常数値をあらわしたものの、1960年代の終りごろから1970年代にかけて出生率は1950年代のなかばごろから1960年代のなかばまでの時期の出生率にくらべるとかなり上昇し25.0～27.0の間の数値を上下しながら推移している。

いくらか詳しくみるならば、三好町の出生率は1960年代のなかばごろまでは全国平均、愛知県平均の数値とほぼ同じ数値を示していたのに対し、1960年代の後半期に入ると全国平均の数値とかなり大きな開きをみせるようになっていく。たとえば、1968年に事例をとれば三好町の出生率が25.5であるのに対して全国平均の数値は18.6となっていて三好町の出生率は6.9ポイントも高くなっている。また、全国平均の出生率との間の開きほどはみられないものの愛知県平均の出生率21.6とくらべても三好町の出生率はかなり高い。これは三好町が工場誘致策を積極的にとった結果、新しく建設された輸送機器関連メーカーに若い労働力が三好町に大量に流入し、彼等によって作り出された若い人びとの家庭で生まれてくる子どもがきわめて多かったからである。

しかしながら、1970年代後半になると、三好町の出生率も再び低下しはじめ、その傾向は1990年ごろまで十数年間続いた。具体的に述べれば三好町の出生率は1975年に19.4であったが年々低下し、1980年には13.4となり、1985年には11.4、さらに1990年には10.1まで低下し続けた。つまり、1960年代の後半から1970年代のなかばごろまでは全国平均の出生率とくらべるとかなり高い出生率の数値がみられた三好町の出生率も1980年代になると全国平均の出生率の数値に近い数値を示すようになってきている。ただ、1990年代に入ってから全国平均ならびに愛知県平均の出生率の数値は僅かであるが低下し続けているのに対して、三好町の出生率は1990年代に入ってから再び上昇しはじめている。具体的にいうならば1989年の時点では、三好町の出生率は10.4、全国平均のそれは10.2、愛知県平均では10.9であったが、三好町の出生率は1990年以降、わずかずつではあるが上昇しはじめ1997年の出生率は13.4になっている。それに対して全国平均の出生率はその間も低下し続け、1997年現在9.5となっている。1990年以降、三好町の出生率が全国平均のそれと全く異なった動きを示したのは、三好町では、1990年代に入ってから三好ヶ丘ニュータウンへの入居が始まり出し若いカップルが大量に流入しはじめていることによるものである。

ところで、第2次世界大戦後のベビー・ブーム以降現在に至るまでの三好町の出生率の推移をみると5つの段階にわけられる。まず、出生率が1950年代に入ると急速に低下した第1段階、ついで1950年代なかばごろからその後約10年間比較的横ばいの安定した第2段階をへて、1960年代の後半になると出生率が再び上昇に転じ、その上昇したところで横ばい状態を保っていた第3段階、1980年代に入ってから再び出生率の低下が著しくなった第4段階、さらに1990年代に入った頃から出生率の低下がくいとめられ僅かながら上昇しつつある第5段階にわけられる。

これに対して、全国の出生率の動向をみると、全国平均のそれは三好町の出生率の動向とは異なり、3つの段階に大きく分けられ、それぞれの段階はつぎのようにその特徴を要約することができる⁷⁾。1950年代から1960年代のなかばごろまでにかけて急速に出生率が低下した時期を第1段階としてあげられるが、その変化は年齢の高い女性の出生率の低下によるものであった。この段階では、20～24歳、25～29歳代の女性の出生率がいずれも20%足らずの低下にとどまっているものの、30～34歳代の女性では50%以上、35～39歳

代の女性では60%以上、40～44歳代、45～49歳代の女性では70～80%以上の著しい出生率の低下がみられた。わずか10年足らずの間に普通出生率が半減するという著しい出生率の低下は主として30歳代から40歳代の年齢の女性の出生率が著しく低下することによってひきおこされたものである。この点については三好町の場合も変わらない。

また、1960年代のなかごろから1970年代の前半ごろまでの第2段階は、全国的にみれば出生率は安定期でほぼ横ばいの状態がみられた時期であった。1955年と1975年との20年間の隔たりをもつ年次の出生率を比較してみると、35歳以上の女性の年齢層のところで著しい出生率の低下はみられるものの、20～24歳代、25～29歳代の女性の年齢層では出生率にほとんど変化はみられない。ただ、30～34歳代と15～19歳代の女性の年齢層のところで30%ほど出生率の低下がみられるものの、当時の出生率の大勢を決めていた20歳代の女性の出生率は著しく安定していたことが全体としてこの段階の出生率水準を横ばいとさせ、いわば安定させてきた要因であった。この第2段階は三好町では第2、第3段階に相当する時期である。この全国平均の第2段階の動きに対して、三好町の場合は1960年代の終りごろから約10年間、出生率は全国平均（1967年：19.4、1975年：19.4）にくらべるとかなり上回った数値を示しており、その上回った数値をその期間維持している（1967年：26.0、1973年：26.7）。このことは、三好町の場合、表9にみられるように、この期間に20～24歳代、25～29歳代の女子人口が著しく増加していることと、しかもその世代の女性の有配偶率が全国平均、愛知県平均の数値にくらべてかなり高かったことが三好町で高い出生率をもたらした要因となっている。事実、三好町の場合、表9に示したように1970年代なかばごろからの5年間に事例をとって出産した母親の年齢についていうと、20～24歳代の母親が出産した子どもは総出産児数の35.9%、25～29歳代の母親が出産した子どもは総出産児数の47.3%、あわせて20歳代の母親が出産した子どもはその時期三好町で生まれた子ども総数の83.2%にも及んでいることから明らかなように、三好町における1960年代の後半から1970年代前半ごろまでの出生率の高さは主として20歳代の母親によって担われたものであった。

ところで、1970年代後半以降、現在にいたる第3段階になると、全国平均の出生率は再び低下しはじめるようになる。すなわち、1975年17.1という数値を示していた出生率は1980年には13.6、1985年には11.9となり、そして1997年には9.5にまで低下し続けている。愛知県平均の出生率も全国平均の数値とほぼ同様の数値を示して下降し続けている。この段階で出生率が下がったもっとも大きな要因は、1975年ごろからその後の約10年間の全国平均の出生率についていえば、いままで出生率の低下がみられなかった20～24歳代で約40%程度の低下がおこっていることがその最大の要因となっている。この段階では40歳以上の女性の年齢層の出生率はすでに下げ止まりとなっており、15～19歳代、25～29歳代でわずかながらの低下、さらに30歳代の出生率はわずかながら上昇している。ただし、1980年代なかば以降、現在に至るまでの期間についていえば、この期間ではさらに25～29歳代で約40%出生率が低下していることである。以上のような理由で第3段階における全国平均の出生率の数値は徐々に低下し続けているといえる。この第3段階は三好町の場合、第4、第5の段階に相当する。三好町の場合、以上述べた全国平均の動向に対し、1970年代後半以降になると急速に出生率は低下し、全国平均の数値程度になっている。1980年には13.1（全国平均13.6、愛知県平均14.5）、1985年には11.4（全国平均11.9、愛知県平均12.5）と全

表9 三好町における母親の年齢層別出生数の推移

(単位：人，％)

	1960(昭和35)年		1965(昭和40)年		1970(昭和45)年		1975(昭和50)年	
母の年齢階級	女子人口	出生数	女子人口	出生数	女子人口	出生数	女子人口	出生数
15～19歳	402		814	1	984	8	772	4
20～24歳	358		698	116	1,206	172	884	130
25～29歳	353		572	164	1,030	205	1,400	272
30～34歳	284		523	27	753	58	1,303	72
35～39歳	262		374	5	638	12	902	11
40～44歳	269		310	1	451	2	722	2
45～49歳	286		296	0	350	0	497	0
合 計	2,214	164	3,587	314	5,412	457	6,480	491
	未婚者数	未婚率	未婚者数	未婚率	未婚者数	未婚率	未婚者数	未婚率
15～19歳	394	98.0	805	98.9	964	98.0	755	97.8
20～24歳	174	48.6	347	49.7	701	58.1	528	59.7
25～29歳	28	7.9	52	9.1	54	5.2	90	6.4
30～34歳	15	5.3	20	3.8	19	2.5	27	2.1

	1980(昭和55)年		1985(昭和60)年		1990(平成2)年		1995(平成7)年	
母の年齢階級	女子人口	出生数	女子人口	出生数	女子人口	出生数	女子人口	出生数
15～19歳	998	2	1,298	6	1,495	4	1,255	5
20～24歳	719	82	897	76	1,147	51	1,622	69
25～29歳	998	204	787	172	959	169	1,678	256
30～34歳	1,532	72	1,039	73	917	85	1,431	164
35～39歳	1,327	15	1,492	12	1,108	15	1,229	24
40～44歳	919	0	1,319	3	1,503	3	1,289	1
45～49歳	715	0	891	0	1,323	0	1,682	0
合 計	7,208	375	7,723	342	7,129	327	10,186	519
	未婚者数	未婚率	未婚者数	未婚率	未婚者数	未婚率	未婚者数	未婚率
15～19歳	990	99.2	1,292	99.5	1,469	98.3	1,239	98.7
20～24歳	498	69.3	703	78.4	970	84.6	1,351	83.3
25～29歳	116	11.6	150	19.1	278	29.0	547	32.6
30～34歳	33	2.2	43	4.1	56	6.1	115	8.0

(出所)『愛知県衛生年報』各年次から作成

国平均、愛知県平均の数値より低くなっている。ところが1990年代に入ってから全国平均の数値や愛知県平均の数値は、さらに依然として減少していつているのに対して、三好町の場合は、1990年代に入った頃から出生率は上昇に転じているのである。

ところで、三好町の1990年代に入った1991年から1995年までの5年間の母親の年齢層別出生数についてみておこう。この5年間に出産した母親の年齢についていえば、20～24歳代の母親が出産した子どもは総出産児数の16.1％、1970年代のはじめの頃の同年齢層の母親の出生状況(1969～1973年5年間の平均37.0％)と比較すると著しく激減していることを確認することができる。それに対して、25～29歳代の母親が出産した子どもは総出産児数の48.9％、30～34歳代の母親では29.1％といずれも比率にして1970年代のはじめ頃のそれにくらべて増加している。このことは表9に示されているように、20年前には、出産する母親の多くは20歳代前半に集中していたのに対して、現在では20歳代の後半から30歳代の前半の年齢層の母親にもっとも多く出産する年齢層が移っていることを示している。

これは初婚の平均年齢が以前と比べて高くなっていることと関連している。以上、明らかにしたように1950年代から現在に至る約50年間に出生率は全体として低下してきているが、かつて年齢階層別出生率は低年齢層の15～19歳代から45～49歳代の高年齢層に至るまで幅広くみられたものが、多少の例外はあるにせよ、現在では特定の年齢階層に集中するようになってきていることを確認することができる。そして最近の10年間ほどの状況をみると、出生が集中する母親の年齢層は徐々にではあるが以前にくらべるとやや高い年齢層にシフトしつつあるといえる。三好町でもいまから20年前には20歳代前半、20年代後半に出産する女性が多かったが、現在では20歳代後半の25～29歳代、30歳代前半の30～34歳代に出産する母親がきわめて多くなっており、やや高い年齢層にシフトしつつあるといえる。

6. 年齢別有配偶率ならびに有配偶出生率の変化

年齢別出生率の状況は年齢別有配偶率と年齢別有配偶出生率に分解して分析すると、その動向はより一層詳細なものとなる。まず、有配偶率が1955年から現在に至るまでどのように変化しているかを見ておこう。三好町の場合、有配偶率についてみると表9に示されているように1955年から1995年までの動向を追ってみると、20～24歳代の女性の未婚率は1955年、39.7%であったが、1975年には59.7%、1985年には78.4%、1995年には83.3%と大幅な上昇がみられる。この40年間に有配偶率は43.6ポイントも減少しているのである。このことが20～24歳代の女性の出生率低下の大きな要因になっていることはいうまでもない。また、25～29歳代の女性についてみると、1955年未婚率はわずか8.7%であったが、25年後の1980年には11.6%とそれほど大きな変化がみられなかったものの、それ以降次第に著しい変化ををはじめ1995年になると、25～29歳代の女性の未婚率は32.6%となっている。かつてこの世代の女性には結婚していないものはきわめて僅かであったが、現在では3人に1人の結婚しないものが現れ、この年齢層の女性についても大きな変化がみられるのである。ただ、15～19歳代の女性の有配偶率は、すでに1955年時点で未婚率98.0%という数値が示すように有配偶率はきわめて低かったので、この年齢層にその後、有配偶率の低下がみられたとしても全体の出生率に与える影響はきわめて軽微なものであったと考えられる。ところが、20～24歳代の女性についていえば、1955年未婚率がわずか39.7%であったが、1995年には83.3%となり、この年齢層の有配偶率の著しい減少は出生率に大きな影響を及ぼしたといえる。また、25～29歳代の女性の未婚率も1955年にはわずか8.7%で、ほとんどのものは有配偶者であったのに、1995年現在では未婚率は32.6%となり有配偶率を著しく減少させているが、20～24歳代の女性の年齢層にみられるような激減ではないにせよ、25～29歳代の女性の有配偶率の変化が出生率に与えた影響もきわめて大きい。このように三好町においても、若い女子人口の有配偶率が大幅に下がったこと、俗にいわれる晩婚化現象ないしは非婚化現象がはっきりとあらわれていること、これがここ最近20年間ほどの出生率の低下に与えている影響はきわめて大きい⁸⁾。

また、三好町の初婚の平均年齢は以前にくらべるとかなり高くなっている。1971年には女性の初婚平均年齢は23.5歳であったが1997年現在では25.9歳となっている。このことは、当地域においても晩婚化への傾向があらわれていることを示している。このような晩婚化

現象があらわれてきた背景にはさまざまな要因が考えられるが、その主なものは、第1には女性の多くが高校さらには大学、専門学校などの高等教育機関へ進学するようになったこと、第2には、かつては農業や自営商工業の家族従業者として働いていた多くの若い女性が企業などの雇用者として就業するようになったこと、第3には女性の結婚観、配偶者選択の意識の著しい変化などがあげられる⁸⁾。

つぎに三好町の有配偶出生率についてみておこう。1950年から1955年までの間では、20歳代では有配偶者出生率はわずかながら低下しているものの、その程度はきわめて少ないのに対して、30～34歳代の女性では37%、35～39歳代では53%、40歳代では60～70%台と女性の年齢が高くなるにつれ有配偶出生率の低下幅は大きくなっている。この傾向は1955年から1975年までの間についてもほぼ同じことがいえる。つまり、ベビー・ブームが去って比較的落ち着いた1950年から1980年までの30年間についてみるかぎり、有配偶出生率は30歳代以上の年齢階層を中心に大幅に低下し、出生率に大きな影響を与えた。このことは複数以上の子どもを出生しなくなる傾向が強まっていることを示している。俗にいう1人の女性が生む子どもの数が減少してきたのである。三好町における1992年から1996年までの5年間に事例をとれば総出産児数の85%が第1児ならびに第2児で占められていることから明らかである。ただ最近の傾向としては30～34歳代の女性ならびに35～39歳代の女性の年齢階層では以前にくらべると出生率が若干高くなりつつある。この点は表9からも確認できるが、これは晩婚化に伴ってあらわれてきた傾向として注目されよう。たとえば、1960年代の前半5年間三好町では25～29歳代の女性が総出産児数の51.7%を出産し、20～24歳代の女性が35.8%、30～34歳代の女性が10.0%出産していたが、最近の5年間（1993年～1997年）についてみると、25～29歳代の女性では総出産児数の48.9%を出産し、30～34歳代の女性が30.9%、20～24歳代の女性が14.1%となっている。出産するそれぞれの女性の年齢層の出産児数の割合は、25～29歳代の年齢階層では殆ど変化はないが、20～24歳代の年齢階層では著しく減少し逆に30～34歳代の年齢階層では大幅に増大している。このことは晩婚化に伴い出産状況に大きな変化があらわれつつあることを示すものである。

7. 死亡率の変化と死亡要因の推移

死亡率は第2次世界大戦前から徐々に低下しつつあったが、その死亡率が本格的に低下したのは1950年代前半になってからであった。戦前三好町の死亡率は愛知県平均の死亡率とほぼ同じ数値で推移していたが、大正末期頃から次第に低下しつつあったといわれている。死亡者数を総人口で除した普通死亡率では、第1回の国勢調査の行われた1920年、26.1（全国平均25.4）とまだかなり高い数値を示していたが、1935年には17.8（全国平均25.4）と、低くなってきている。戦後についていえば、三好町の死亡率は1949年には9.8（全国平均11.6、愛知県平均11.0）であったが、その数値は戦前のどの時期にくらべても著しく低くなっている。1952年以降、三好町の死亡率は表8に示されているように10.0を割り、さらに1950年代なかば以降になると7.0～8.0となっている。また、1960年代後半期には5.5～6.0の範囲を上下する数値を示しており、さらに1970年代前半期以降、4.5～3.5の範囲の数値を示しながら現在に至っている。具体的にいえば、高度経済成長が峠を越えはじめた1980

年には三好町の死亡率は3.5、1985年には4.0、1990年には4.9、1997年には4.3となっている。全国平均の死亡率が1980年には6.2（愛知県5.1）、1985年には6.3（愛知県5.2）、1990年には6.7（愛知県5.7）、1997年現在では7.3（愛知県6.3）、であるから、三好町の死亡率が1965年以降、全国平均の数値とくらべてみても、また愛知県平均の数値とくらべてみても著しく低い。1997年時点についていえば、三好町の死亡率は4.3であるから全国平均7.4に3.1ポイントも低いし、愛知県平均6.3にくらべても2.0ポイントも低くなっている。この理由はさまざまなことが考えられるが、もっとも大きな要因は三好町の人口構成が1965年以降工場誘致を積極的におこない若い労働力を数多く流入させ続け、さらにはニュータウンの造成によって多数の若いカップルが流入している結果、全国平均、愛知県平均にくらべて若い人びとの多い人口構造となっているからである。（平均年齢：三好町36.0歳、愛知県39.1歳、全国39.6歳）

以上述べたように、死亡率は第2次世界大戦後著しく低下し、その結果、平均寿命は大幅に伸びたが、このことは死亡原因の変化からも明らかにすることができる。第2次世界大戦前、1935年前後の死因別死亡率の状況をみると、第1位は全結核であり、それに続いて第2位が肺炎および気管支炎、第3位が感染性の高い胃腸炎、第4位脳血管疾患、第5位老衰となっており、これら5つの死因で全死亡者数の半分以上を占めていた。この状況は1950年代の前半ごろまで続いていた。ところが、1950年代なかばごろになると死因別死亡率は、それ以前とはすっかり様相を変えた。第1位は脳血管疾患、第2位悪性新生物、第3位老衰、第4位心疾患というように、この頃から死因順位に大きな変化がみられるようになっていく。もっとも大きな変化はかつてひとたび罹ったらなおらない病いとされて恐れられていた全結核による死亡者が急速に減少したためである。これは1950年代のなかごろ、結核によくきく新薬がアメリカから導入され広く普及したためである。なお、1985年以降現在に至る死因別死亡率の動きをみると第1位が悪性新生物、それについて心疾患、第3位脳血管疾患となっていて現在も変わっていない⁹⁾。

以上のことから明らかなように、死亡率低下に著しく影響を与えたのは、全結核、肺炎・気管支炎、感染性の強い胃腸炎による死亡者の低下であり、これらの疾病はいずれもかつては非常に重要な死亡原因となっていたものであるが、現在では医療技術の進歩や栄養状態の改善で死亡の危険性はきわめて少なくなり、このことが1950年代の終りごろから1960年代のはじめごろ、死亡率の低下をもたらした最大の理由であったことは確かである。これに対して、脳血管疾患は戦前でもかなり死亡率の高いものであったが、戦後も依然としてその改善はみられず、1965年ごろになるとむしろ戦前を上まわる死亡率となった。しかし、最近ではその治療方法も進んできて、その疾患による死亡率には低下のきざしがみられる。悪性新生物の死亡率は高くなる一方で現在死因の第1位になっている。第2次世界大戦前は結核、肺炎・気管支炎、感染性の高い胃腸炎などによって多数の人命が失われていたが、現在では死亡率は全体としては著しく減少しているものの、三好町についていえば1997年現在、悪性新生物で死亡するものは死亡者全体の30.8%（全国26.8%、愛知県30.4%）、脳血管疾患16.5%（全国13.5%、愛知県14.4%）、心疾患11.5%（全国20.5%、愛知県16.5%）が主要な死因となっている。

戦後、死亡率は著しく低下したが、これは先に述べたように結核、肺炎・気管支炎、胃腸炎など感染性疾患を医療の飛躍的進歩や栄養状態の改善で押さえこむことができ、その

結果、乳幼児、青少年など、どちらかといえば年齢の低い年齢階層の死亡率を著しく低下させたことに帰因するものである。事実、1990年三好町の死亡者総数159人のうち、65歳以上の死亡者の占める割合は高く71.2%となっている。また1997年についてみても死亡者数182人のうち65歳以上の死亡者数の比率は68.9%である。以上のように現在では死亡者数の約7割以上が高齢者の死亡であり、彼らの殆どは悪性新生物、心疾患、脳血管疾患で死亡している。言葉を換えていえば現在死亡の主要原因となっているものは悪性新生物、心疾患、脳血管疾患などであるが、これらはいずれも中高年齢層の死亡率低下の障害となっているものである。今後、これら成人病の予防には健康診断を普及させることによって中高年齢層の死亡率をいくらか減少させることになるだろうが、そうなればより一層高齢者の増加をもたらす、人口の高齢化を深めることになるだろうをえない。

8. 転出入者の動向

1997年10月から1998年9月までの1年間の総移動者数(転入者と転出者の合計)は5,850人(転入者数3,448人、転出者数2,402人)である。総移動者数を年齢階層5区分でみると、0～14歳では982人、15～19歳では368人、20～29歳では2,264人、30～64歳では2,074人、65歳以上では162人となっている。20～29歳代の年齢階層の移動者は全移動者総数の38.7%を占めてもっとも多く、それについて30～64歳代の年齢階層が35.5%となっている。従来、20～29歳代の移動者がきわめて多く、そのほかに15～19歳代の年齢階層の移動者もかなりの数にのぼっていたが、ここ20年間の状況を見ると、15～19歳代の年齢層の移動者数は激減し、それに代わって30～64歳代の年齢層の転出入者数が増大し、20～29歳代の年齢層の転出入者数に近づきつつある状況がみられる。三好町の転出入者においてみられる特徴は雇用労働にたずさわる生産年齢人口に属する人びとの転出入者数の割合が著しく高いことである。また、もう一つの特徴は三好町の人口動向で殆どの年次についていえることであるが、三好町の人口増加は、自然増よりも転入超過にもとづく社会増によっていることである。もっとも、三好町においても表4にみられるように1970年代のなかばごろから約10年間は社会増よりも自然増のほうが多くなっていたが、それ以外の各年次ではいずれも社会増が自然増を上回っており社会増が三好町の人口増加をおしあげてきたものである。

ところで、1998年現在の三好町の県外移動者は1,784人で三好町の転出入者総数の約30%を占めている。もっとも1970年代の後半期以前までは転出入者総数のうち、県外からの転出入者数のほうが県内からの転出入者数よりはるかに多かった。ところが、1970年代後半以降、県外からの転出入者数のほうが県内転出入者数にくらべて少なくなってきた。三好町の転出入者の性格が1970年代の後半期ごろを境にして大きく変わってきたといえる。それでも、まだ1982年当時では、県内転出入者数は1,746人であったのに対して県外転出入者数は2,540人を数え、全転出入者数の約60%に及んでいた。先にも述べたように1997年現在の県外転出入者数の割合が30%であるから、1982年以降、県外転出入者数の割合がいかに著しく減少しているかが理解される。

また、1997年10月から1998年9月までの1年間三好町の県外転出入者数を地域別にみると、東海地方(ここでは、愛知県を除く岐阜県、三重県、静岡県の3県を指す)が429人

でもっとも多く、それに続いて関東地方で315人、近畿地方209人となっている。なお、国外から(へ)の転出入者数は354人で、県外転出入者数の19.8%を占め、かなりの数にのぼっている。国外から働きにくる外国人は1970年代のなかばごろ、三好町では数人程度であったが、1990年ごろから急激に増えはじめた。彼らの多くは南アメリカ諸地域の経済不況のなかで就業の場を求めて日本へやってきた日系ブラジル人である。また、県外転出入者のうち、転出入超過数は1997年10月から1998年9月までの1年間では166人で、その内訳を国内と国外とに分けてみると国内が120人の転入超過、国外が46人の転入超過となっている。表10にみられるように、転出入者数の転入超過は殆どの年次にみられたものであった。

つぎに県外転出入者を地域別にみると、1997年10月から1998年9月までの1年間では関東地域を除くすべての地域からは、転入超過となっている。また、県外転出入者のこの1年間の転入超過を年齢5区分別にみると各年齢層とも転入超過となっている。ところで、三好町における地域別の県外転出入者数の動きをいくらか長期的にみてみると、つぎのようなことが明らかになる。1982年10月から1998年9月までの過去16年間の各県ごとの三好町の転出入者数を整理してみると、表11に示したように、この16年間に転入者数は35,660人、転出者数は24,793人となっている。差引転入超過数10,867人である。うち県内からの転入者が25,748人で三好町に転入してきた総数の71.2%を占めている。また、県内転出者は16,234人で転出者総数の66.0%を占めている。また、国外からの転入者はこの期間に1,709人、国外へ転出していった者は1,229人で、転入超過数480人となっている。ところで、県外転入者数のうち、もっとも多いのが県別では岐阜県からの転入で883人、ついで静岡県707人、三重県からの転入638人、東京都からのもの562人と続く。県内の転入者を含めた東海地方からの転入者は転入者総数の77.4%に及んでいる。また、三好町からの転出者は岐阜県へが701人でもっとも多く、それについて三重県576人、東京都546人、静岡県へのもの537人と続く。県内へ転出したものは転出者総数の66.0%にもものぼる。転出入ともに多いところは、三好町にとって人口交流の活発な地域ともいえよう。これらの数値からみると、三好町の転出入者の多くは、東北や九州など遠い後進地域から転出入するものではなく、大部分のものが東海地域の人びとであるといえる。このことはわが国の大都市圏へと流入してきた人びとの多くが東北や九州などの人びとであったことからいえばかなり異なった性格のものであると考えられる。

つぎに、先に整理した16年間の転出入状況を1982年10月から1990年9月までの前半の8年間と、1990年10月から1998年9月までの後半の8年間とにわけ、前半の8年間と後半の8年間とにどのような変化がみられるかをみておこう。両者の期間にはかなりきわだちた違いをみることができる。まず前半の1982年10月から1990年9月までの8年間についていうと、この期間は転入、転出ともに少なく、この期間の転入者は11,485人、転出者は9,953人で、この期間の転入超過数も1,532人と少ない。この期間はかつて日本経済の高度経済成長とともに工業化の立ち遅れた農村から流入する大量の人口を受け入れ著しい人口増加をみせていた状況が消えて、1970年代なかば以降、低成長への転換が各産業部門に浸透していくと、一転して工業化の進んでいる地域の人口増加率は著しく鈍化していったが、その状態をよくあらわしている。また、この時期三好町から転出していったものは、全国すべての県に及んでいるが、北海道、関東地方、近畿地方、九州地方への転出者が多い。彼らの多くはUターンのもの、転職していったものである。この時期、転入し三好町

戸 谷 修

表10 三好町転出入移動者数の推移（社会増減）

（単位：人）

年 次	転 入	転 出	社会増減	年 次	転 入	転 出	社会増減	年 次	転 入	転 出	社会増減
1962年(S.37)	857	304	553	1974年(S.49)	1,860	1,567	293	1986年(S.61)	1,485	1,166	319
1963年(S.38)	902	331	571	1975年(S.50)	1,741	1,483	258	1987年(S.62)	1,493	1,291	202
1964年(S.39)	1,019	460	559	1976年(S.51)	1,805	1,245	560	1988年(S.63)	1,700	1,186	514
1965年(S.40)	2,105	683	1,422	1977年(S.52)	1,683	1,371	312	1989年(H.1)	1,464	1,301	163
1966年(S.41)	2,113	833	1,280	1978年(S.53)	1,560	1,279	281	1990年(H.2)	1,754	1,392	362
1967年(S.42)	1,499	1,049	450	1979年(S.54)	1,429	1,430	-1	1991年(H.3)	2,551	1,587	964
1968年(S.43)	1,839	1,186	653	1980年(S.55)	1,298	1,207	91	1992年(H.4)	3,261	1,756	1,505
1969年(S.44)	1,901	1,363	538	1981年(S.56)	1,387	1,291	96	1993年(H.5)	3,192	1,896	1,296
1970年(S.45)	2,789	1,405	1,384	1982年(S.57)	1,355	1,185	170	1994年(H.6)	2,821	1,927	894
1971年(S.46)	2,800	1,387	1,413	1983年(S.58)	1,187	1,207	-20	1995年(H.7)	3,643	2,051	1,592
1972年(S.47)	2,266	1,413	853	1984年(S.59)	1,184	1,198	-14	1996年(H.8)	3,351	2,256	1,095
1973年(S.48)	2,068	1,507	561	1985年(S.60)	1,272	1,289	-17	1997年(H.9)	3,012	2,293	719
								1998年(H.10)	3,448	2,402	1,046

出所『愛知県住民異動調査年報』、『あいちの人口』各年次より作成。

- （注）・1962（昭和37）年から1965（昭和40）年までは各年次とも1月～12月の移動者数。
 ・1966（昭和41）年以降の数値は前年の10月から、その次年の9月までの移動者数。
 ・「その他の増減」は社会増減に含まれていない。

表11 三好町における最近16年間の転出入先別移動者数

（単位：人、％）

		1982年(S.57)10月～1998年(H.10)9月 までの16年間の移動者数					1982年(S.57)10月～1990年(H.元)9月 までの8年間の移動者数				1990年(H.元)10月～1998年(H.10)9月 までの8年間の移動者数			
		転 入	転入比	転 出	転出比	転出入差	転 入	転入比	転 出	転出比	転 入	転入比	転 出	転出比
総 数		35,660	100.0	24,793	100.0	10,867	11,485	100.0	9,953	100.0	24,175	100.0	14,840	100.0
県 内		25,748	72.2	16,234	65.5	9,514	8,217	71.5	6,759	68.0	17,531	72.5	9,475	63.8
県 外		9,912	27.8	8,559	34.5	1,353	3,268	28.5	3,194	32.0	6,644	27.5	5,365	36.2
北 海 道		267	0.7	206	0.8	61	128	1.1	78	0.8	139	0.6	128	0.9
東 北 地 方		225	0.6	229	0.9	-4	110	1.0	111	1.1	115	0.5	118	0.8
関 東 地 方		1,558	4.4	1,510	6.1	48	391	3.4	565	5.7	1,167	4.8	945	6.4
北陸・東山地方		679	1.9	665	2.7	14	268	2.3	337	3.4	411	1.7	328	2.2
東 海 地 方														
岐 阜 県		883	2.5	828	3.3	55	324	2.9	301	3.0	559	2.3	527	3.6
静 岡 県		707	2.0	535	2.2	172	96	0.8	155	1.6	611	2.5	380	2.6
三 重 県		638	1.8	576	2.3	62	278	2.4	265	2.7	360	1.5	311	2.1
近 畿 地 方		1,178	3.3	1,036	4.2	142	365	3.2	372	3.7	813	3.4	664	4.5
中 国 地 方		305	0.9	235	0.9	70	102	0.9	91	0.9	203	0.8	144	1.0
四 国 地 方		259	0.7	194	0.8	65	111	1.0	77	0.8	148	0.6	117	0.8
九 州 地 方		1,503	4.2	1,316	5.3	187	882	7.7	706	7.0	622	2.6	610	4.1
国 外		1,709	4.8	1,229	5.0	480	205	1.8	152	1.4	1,504	6.2	1,077	7.2
不 祥		1	0.0	0	—	1	1	0	0	0	0	—	0	—

（出所）『あいちの人口』（年報）各年次より作成

に定着したものの殆どは県内転入者が多かった。このことは、転入超過総数1,532人のうち、県内転入超過数が1,509人、割合にして98.5％を占めていることから明らかである。以上述べた先の8年間の転出入状況にくらべて、それに続く1990年10月から1998年9月までの8年間の転出入状況についていうと、その8年間の転入者は24,175人、転出者14,840人で、先の8年間の転出入にくらべて三好町への社会移動が著しく活発になったこと、さらには転入超過数が9,335人と大幅に伸びて三好町の人口増加に再び拍車がかかってきたことである。この期間は三好町では三好ヶ丘ニュータウンへの入居がはじまり出した時期である。なお、人口移動が活発になったことは県内転出入だけにとどまらず、全国に広範に及んでいるが転入超過数の96.3％と大部分のものは県内転入者である。これは三好ヶ丘ニュータウンの入居者の多くが三好町に比較的近い県内から移ってきた人びとであったことを示している。また、この時期には海外からの労働力移動も盛んになってきている。先

の前半の8年間に海外から転入してきたものが205人、国外へ転出していったものが152人にすぎないのに対し、それに続く後半の8年間は、この時期に国外からの転入者1,504人、転出者1,077人となっていることから明らかである。

つぎに、県外移動者の転出入超過数を年齢階層とクロスさせながらみておこう。転出入超過数は各年齢階層とも転入超過となっている。1981年10月から1998年9月までの17年間の県外転出入者数を年齢5区分別に整理してみると、0～14歳代では転入者数1,941人、転出者数1,862人、差引転入超過数79人、15～19歳代では転入者数2,052人、転出者数1,528人、差引転入超過数524人、20～29歳代では転入者数4,359人、転出者数3,809人、差引転入超過数550人、30～64歳代では転入者数3,968人、転出者数3,529人、差引超過数439人、65歳以上では転入者数361人、転出者数281人、差引転入超過数80人といずれの年齢階層も転入超過となっている。県外転出入者のうち、転入超過の多い人びとの年齢階層は生産年齢人口の人びとで、全転入超過数の90.5%にも及んでいる。また、年齢階層別にみた転出入者数を地域別と関連させながらみると、つぎの点が明らかになる。15～19歳代では九州、東海、中国地方からの転入者で転入超過数が多く、20～29歳代、30～64歳代ではそれぞれ関東、東海地方で転出超過数が多くなっている。このことから15～19歳代では就職のため流入しており、20歳以上のもので転出する多くはUターン、転勤転職の理由で転出していく状況を確認することができる。三好町は県外移動数の転入超過数が愛知県のなかではきわめて多い市町村の一つである。1997年10月から1998年9月までの1年間の三好町における転入超過数は166人で愛知県内では転入超過数の多い市町村の順位では第8位となっている。また、三好町の県内移動者数（県内転出入者数）は1998年では4,066人で前年（3,511人）を555人上回っている。三好町の県内移動者の転出入超過数をみると、880人の転入超過となついる。県内移動者の転入超過数では、三好町は愛知県のなかでもその数が毎年きわめて多いところである。1998年では、転入超過数のもっとも多い市町村で第1位となっている。

以上述べてきたことから明らかなように、県外転出入に伴う転入超過、さらに県内転出入の転入超過にもとづく社会増が三好町の人口増加を推し進めてきた最大の要因であったし、この社会増の動向を明らかにすることは三好町の人口構造の特徴を把握するうえにもきわめて重要なことである¹⁰⁾。また、三好町が社会移動で転出入する人びとを通じて広く全国的に、また海外に交流の輪を大きくしていく一つの契機になっていることは確かである。

9. おわりに

1950年、9,372人であった人口は1999年11月現在、44,768人を擁する都市へと脱皮し大きく成長した。こうした動きは豊田・刈谷など輸送機器製造業を主軸とする西三河地域に典型的にみられるものである。1950年代の後半から1970年代にかけての著しい人口増は三好町が高度経済成長策の波にのって工場誘致を積極的に行った結果であった。また、1990年代以降の人口増は主として三好ヶ丘ニュータウンが建設され、そこへ移り住むようになった人びとによるものである。このニュータウンの実現は、わが国の生産拠点が海外へと移転する背景のもとで、従来のような製造業だけに頼っていたのでは町のより一層の発展は

望めないとの認識にたつて、住宅団地の誘致に積極的にのり出した結果であると考えられる。いずれにしても、三好町の人口構造は愛知県全体と比較しても生産年齢人口の割合がきわめて高い。また、その結果でもあるが、現在のところ高齢人口比率はきわめて低いことが確認される。

また、三好町の出生率は年々低下の傾向をたどり少子化の状態になりつつあるが、当地域において特徴的なことは全国平均の出生率が1970年代なかば以降一貫して低下の傾向をたどっているのに対し、三好町ではその傾向をとりながら1990年代に入ってから出生率がやや上昇に転じていることは特記すべきことである。これは当地域の女性の年齢別有配偶者数、ならびにそれに伴う年齢別有配偶出生率の変化の動向が全国平均のそれとかなり異なっていることによるものである。

さらに、年齢階層別・地域別にみた県外・県内の転出入者の動向についてみるとつぎのことが明らかになる。三好町では県外では岐阜県、三重県、静岡県の東海3県との人口交流が高く、県内移動者の転入超過数では三好町は愛知県のなかでも毎年きわめて高く、1998年現在では県内からの転入超過数が第1位となっている。これら県内・県外ともに転入超過に伴う社会増が三好町の人口増を推し進めてきたもっとも大きな要因であった。人口の動向からみれば、1960年代のはじめごろから現在に至る40年間は、三好町にとってきわめて大きな変動期であったといえる。三好町にとっての21世紀は、人口構造の変化からみるならば、かつて三好町に永く先祖とともに代々日々の生活を過ごしてきた人びとと、新しく三好町に入ってきた人びとが三好町を共通のふるさととし、交わりを増しより一層飛躍した三好町をつくりあげていかなければならない時であるといえよう。まさに共生の時代の到来である。人口構造の推移からみても、この地域はわが国の高度経済成長、それに続く経済発展のなかで、いいかえるならば、推進された戦後の経済開発によって、もっともその成果を享受した恵まれた地域の一つであったといえる。その意味で高度経済成長以降の経済の動きのなかで、過疎化に追いこまれ、ふるさとを荒廃の危機にさらされた東三河山間部地域ときわめて対照的である。

注

- 1) 高須健至「工業の展開」、『都市近郊地域の経済と社会』愛知大学中部地方産業研究所、1991年、pp. 118-138.
- 2) 塩澤君夫・近藤哲男他『愛知県の百年』山川出版社、1993年、pp. 306-324.
- 3) 『三好町史』第二巻、三好町、1978年、pp. 287-289.
- 4) 『第5次三好町総合計画』三好町、1999年、p. 21.
- 5) 『三好町史』第三巻、三好町、1998年、pp. 119-121.
- 6) 伊藤達也『生活の中の人口学』古今書院、1994年、pp. 58-61.
- 7) 岡崎陽一『現代日本人口論』改訂版、古今書院、1994年、pp. 58-61.
- 8) 人口問題審議会他編『日本の人口・日本の家族』東洋経済新報社、1991年、pp. 28-52.
- 9) 『平成9年 愛知県衛生年報』愛知県、1999年、pp. 3-5.
- 10) 伊藤達也、前掲書、pp. 136-145.